



薬生薬審発 0824 第 8 号
令和 4 年 8 月 24 日

各 都道府県
保健所設置市
特別区 衛生主管部（局）長 殿

厚生労働省医薬・生活衛生局医薬品審査管理課長
(公 印 省 略)

ラブリズマブ（遺伝子組換え）製剤の使用にあたって
の留意事項について

ラブリズマブ（遺伝子組換え）製剤（販売名：ユルトミリス点滴静注 300mg、同 HI 点滴静注 300mg/3mL、同 HI 点滴静注 1100mg/11mL）については、本日、「全身型重症筋無力症（免疫グロブリン大量静注療法又は血液浄化療法による症状の管理が困難な場合に限る）」を効能又は効果として追加する、製造販売承認事項一部変更承認したところですが、本剤については、髄膜炎菌感染症の発症のリスクが高まることが懸念されること等から、その使用にあたっては、特に下記の点につきご留意いただくよう貴管下の医療機関へのご周知方よろしく申し上げます。

記

1. 本剤については、本承認に際し、製造販売業者による全症例を対象とした製造販売後調査等の実施、適正な流通管理の実施等を承認条件として付しましたので、その実施にご協力をお願いします。

【承認条件】

<全身型重症筋無力症（免疫グロブリン大量静注療法又は血液浄化療法による症状の管理が困難な場合に限る）>

1. 医薬品リスク管理計画を策定の上、適切に実施すること。
2. 国内での治験症例が極めて限られていることから、製造販売後、一定数の症例に係るデータが集積されるまでの間は、全症例を対象に使用成績調査を実施することにより、本剤使用患者の背景情報を把握するとともに、本剤の安

した上で、本剤投与の是非を慎重に検討し、適切な対象患者に使用すること。
また、本剤投与に際しては、緊急治療を要する場合等を除いて、原則、本剤投与開始の少なくとも2週間前までに髄膜炎菌に対するワクチンを接種すること。特に小児への本剤投与に際しては、肺炎球菌、インフルエンザ菌 b 型に対するワクチンの接種状況を確認し、未接種の場合にはそれぞれのワクチンの接種を検討すること。

<全身型重症筋無力症（免疫グロブリン大量静注療法又は血液浄化療法による症状の管理が困難な場合に限る）>

5.6 本剤は、抗アセチルコリン受容体抗体陽性の患者に使用すること。

5.7 本剤は、ステロイド剤又はステロイド剤以外の免疫抑制剤が十分に奏効しない場合に、以下に示す患者への投与を考慮すること。

- ・免疫グロブリン大量静注療法又は血液浄化療法を施行しても症状の管理が困難な患者
- ・合併症や副作用等により、免疫グロブリン大量静注療法又は血液浄化療法の施行が困難な患者

**2022年8月改訂(第6版、効能変更)
*2022年1月改訂(第5版)

日本標準商品分類番号
876399

貯法:凍結を避け、2~8℃で保存
*有効期間:(**ユルトミリス点滴静注300mg**) 30ヵ月
(**ユルトミリスHI点滴静注300mg/3mL**及び
1100mg/11mL) 18ヵ月

	300mg	HI 300mg/3mL	HI 1100mg/11mL
承認番号	30100AMX00022000	30300AMX00316000	30300AMX00315000
販売開始	2019年9月	2021年12月	2021年12月

抗補体(C5)モノクローナル抗体製剤
ラブリズマブ(遺伝子組換え)点滴静注製剤
生物由来製品、劇薬、処方箋医薬品^{注)}

ユルトミリス®点滴静注 300mg ユルトミリス®HI点滴静注 300mg/3mL ユルトミリス®HI点滴静注 1100mg/11mL

Ravulizumab (Genetical Recombination)
ULTOMIRIS® for Intravenous Infusion

注) 注意-医師等の処方箋により使用すること

1. 警告

- 1.1 本剤の投与により髄膜炎菌感染症を発症することがあり、死亡に至るおそれもあるため、以下の点に十分注意すること。[5.1、9.1.1、11.1.1 参照]
 - 1.1.1 本剤の投与に際しては、髄膜炎菌感染症の初期徴候(発熱、頭痛、項部硬直等)に注意して観察を十分に行い、髄膜炎菌感染症が疑われた場合には、直ちに診察し、抗菌剤の投与等の適切な処置を行うこと。
 - 1.1.2 緊急な治療を要する場合等を除いて、原則、本剤投与前に髄膜炎菌に対するワクチンを接種すること。必要に応じてワクチンの追加接種を考慮すること。
 - 1.1.3 髄膜炎菌感染症は致命的な経過をたどることがあるので、緊急時に十分に措置できる医療施設及び医師のもとで、あるいは髄膜炎菌感染症の診断及び治療が可能な医療施設との連携下で投与すること。
 - 1.1.4 髄膜炎菌感染症のリスクについて患者に説明し、当該感染症の初期徴候を確実に理解させ、髄膜炎菌感染症に関連する症状が発現した場合には、主治医に連絡するよう患者に注意を与えること。

- ** 1.2 本剤は、発作性夜間ヘモグロビン尿症、非典型溶血性尿毒症症候群あるいは全身型重症筋無力症に十分な知識を持つ医師のもとで、治療上の有益性が危険性を上まわると判断される場合にのみ投与すること。また、本剤投与開始に先立ち、本剤は疾病を完治させる薬剤ではないことを含め、本剤の有効性及び危険性を患者又はその家族に十分説明し、同意を得てから投与すること。[5.1、11.1.1 参照]

2. 禁忌(次の患者には投与しないこと)

- 2.1 髄膜炎菌感染症に罹患している患者〔症状を悪化させるおそれがある。〕
- 2.2 本剤の成分に対し過敏症の既往歴のある患者

3. 組成・性状

3.1 組成

製剤	ユルトミリス点滴静注 300mg	ユルトミリスHI点滴静注 300mg/3mL	ユルトミリスHI点滴静注 1100mg/11mL
	1バイアル(ストッパー付) 30mL中	1バイアル(ストッパー付) 3mL中	1バイアル(ストッパー付) 11mL中
有効成分	ラブリズマブ(遺伝子組換え)	300mg	300mg
			1,100mg

塩化ナトリウム	263.1mg	-	-
リン酸二水素ナトリウム一水和物	13.8mg	13.7mg	50.3mg
リン酸一水素ナトリウム七水和物	53.4mg	13.3mg	48.6mg
ポリソルベート80	6.0mg	1.5mg	5.5mg
L-アルギニン	-	13.0mg	47.6mg
精製白糖	-	150mg	550mg

本剤は、チャイニーズハムスター卵巣(CHO)由来の樹立細胞株を用いて製造される。

3.2 製剤の性状

販売名	ユルトミリス点滴静注 300mg	ユルトミリスHI点滴静注 300mg/3mL ユルトミリスHI点滴静注 1100mg/11mL
性状	澄明からわずかに白色を帯びた半透明の液	無色~微黄色の半透明の液
pH	pH7.0	pH7.4
浸透圧比(生理食塩液対比)	約1(日局生理食塩液により希釈後(5mg/mL))	約1(日局生理食塩液により希釈後(50mg/mL))

**4. 効能又は効果

- 発作性夜間ヘモグロビン尿症
- 非典型溶血性尿毒症症候群
- 全身型重症筋無力症(免疫グロブリン大量静注療法又は血液浄化療法による症状の管理が困難な場合に限り)

5. 効能又は効果に関連する注意

(効能共通)

- 5.1 本剤は、補体C5の開裂を阻害し、終末補体複合体C5b-9の生成を抑制すると考えられるため、髄膜炎菌をはじめとする莢膜形成細菌による感染症を発症しやすくなる可能性があることから、本剤の有効性及び安全性を十分に理解した上で、本剤投与の是非を慎重に検討し、適切な対象患者に使用すること。また、本剤投与に際しては、緊急治療を要する場合等を除いて、原則、本剤投与開始の少なくとも2週間前までに髄膜炎菌に対するワクチンを接種すること。特に小児への本剤投与に際しては、肺炎球菌、インフルエンザ菌b型に対するワクチンの接種状況を確認し、未接種の場合にはそれぞれのワクチンの接種を検討すること。[1.1、1.2、9.1.1、9.1.2、11.1.1、11.1.2、17.1.1-17.1.5 参照]

(発作性夜間ヘモグロビン尿症)

- 5.2 本剤は、フローサイトメトリー法等により、発作性夜間ヘモグロビン尿症と確定診断された患者に使用すること。

9.6 授乳婦

治療上の有益性及び母乳栄養の有益性を考慮し、授乳の継続又は中止を検討すること。

**9.7 小児等

〈発作性夜間ヘモグロビン尿症及び全身型重症筋無力症（免疫グロブリン大量静注療法又は血液浄化療法による症状の管理が困難な場合に限る）〉

9.7.1 小児等を対象とした有効性及び安全性を指標とした臨床試験は実施していない。

〈非典型溶血性尿毒症症候群〉

9.7.2 体重5kg未満の小児等を対象とした有効性及び安全性を指標とした臨床試験は実施していない。

9.8 高齢者

患者の状態を観察しながら、慎重に投与すること。一般に生理機能（腎機能、肝機能、免疫機能等）が低下している。

**10. 相互作用

10.2 併用注意（併用に注意すること）

薬剤名等	臨床症状・措置方法	機序・危険因子
** 人免疫グロブリン製剤 (ポリエチレングリコール処理人免疫グロブリン等) [7.6 参照]	人免疫グロブリン製剤との併用投与によって本剤の効果が減弱するおそれがあるので、併用する場合には、本剤の補充投与を考慮すること。	人免疫グロブリン製剤との継続的な併用投与により、本剤の血清中濃度が低下する可能性がある ¹⁾²⁾³⁾ 。
** エフガルチギモドアルファ（遺伝子組換え）	本剤の効果が減弱するおそれがあるので、本剤による治療を開始する場合には、エフガルチギモドアルファのサイクル投与における最終投与から2週間後以降に投与することが望ましい。	エフガルチギモドアルファにより、本剤を含む胎児性Fc受容体(FcRn)に結合する薬剤の血清中濃度が低下する可能性がある。

11. 副作用

次の副作用があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止するなど適切な処置を行うこと。

11.1 重大な副作用

11.1.1 髄膜炎菌感染症（頻度不明）

髄膜炎又は敗血症を発症し、急激に重症化することがあるので、本剤の投与に際しては、当該感染症の初期徴候（発熱、頭痛、項部硬直、羞明、精神状態の変化、痙攣、悪心・嘔吐、紫斑、点状出血等）等の観察を十分に行うこと。髄膜炎菌感染症が疑われた場合には、直ちに診察し、抗菌剤の投与等の適切な処置を行うこと。髄膜炎菌に対するワクチンを接種しても発症した例が認められており、死亡に至るおそれもある。
[1.1、1.2、5.1、9.1.1、9.1.2 参照]

**11.1.2 重篤な感染症（15%）

播種性淋菌感染症、肺炎球菌感染、インフルエンザ菌感染等の重篤な感染症があらわれることがある。
[5.1、9.1.2 参照]

11.1.3 infusion reaction（頻度不明）

ショック、アナフィラキシー等があらわれることがある。

**11.2 その他の副作用

	10%以上	1%以上 10%未満	1%未満	頻度不明
** 胃腸障害	-	悪心、嘔吐、下痢	消化不良、腹痛	-
** 一般・全身障害 および投与部位 の状態	-	発熱、疲労	悪寒、インフルエンザ様疾患	無力症
感染症および寄生虫症	-	上気道感染、上咽頭炎	-	ナイセリア感染（淋菌等）

	10%以上	1%以上 10%未満	1%未満	頻度不明
傷害、中毒および処置合併症	-	注入に伴う反応	-	-
** 筋骨格系および結合組織障害	-	四肢痛、関節痛、筋肉痛	背部痛、筋痙攣	-
神経系障害	頭痛	浮動性めまい	-	-
** 皮膚および皮下組織障害	-	そう痒症、発疹	蕁麻疹	-

14. 適用上の注意

14.1 薬剤調製時の注意

〈製剤共通〉

14.1.1 希釈前に、変色、微粒子、沈殿等がないことを目視にて確認し、異常が認められた場合は使用しないこと。

14.1.2 滅菌シリンジでバイアルから必要量を抜き取り、日局生理食塩液を用い、点滴バッグ等で本剤を希釈する。本剤1バイアルの希釈に必要な日局生理食塩液の量及び希釈後の本剤の濃度は下表を参考にすること。

本剤1バイアルの希釈に必要な日局生理食塩液の量及び希釈後の本剤の濃度

	本剤 (1バイアル)	希釈に必要な 日局生理食塩液 (1バイアルあたり)	希釈後の 本剤の濃度
エルトミス点注300mg	30mL	30mL	5mg/mL
エルトミスHI点注300mg/3mL	3mL	3mL	50mg/mL
エルトミスHI点注1100mg/11mL	11mL	11mL	50mg/mL

14.1.3 濃度の異なる製剤（エルトミス点注300mgとエルトミスHI点注300mg/3mL及び1100mg/11mL）を混合して使用しないこと。

14.1.4 希釈液は穏やかに混合し、振盪しないこと。

14.1.5 調製後、変色、微粒子、沈殿等がないことを目視にて確認し、異常が認められた場合は使用しないこと。

14.1.6 調製後は速やかに投与すること。

14.1.7 本剤のバイアルは1回使い切りである。バイアル中の未使用残液は適切に廃棄すること。

〈エルトミス点注300mg〉

14.1.8 調製した溶液を直ちに使用しない場合は、2～8℃での保存では24時間以内、又は常温保存では6時間以内に使用すること。

〈エルトミスHI点注300mg/3mL及び1100mg/11mL〉

14.1.9 調製した溶液を直ちに使用しない場合は、2～8℃での保存では24時間以内に、常温保存では4時間以内に使用すること。

14.2 薬剤投与時の注意

〈製剤共通〉

14.2.1 0.22ミクロンのフィルターを通して投与すること。本剤は独立したラインより投与するものとし、他の注射剤、輸液等と混合しないこと。

14.2.2 本剤の投与中に副作用が発現した場合は、医師の判断で投与速度を遅くする又は投与を中止し、投与終了後、患者の症状が安定するまで慎重に観察すること。

〈エルトミス点注300mg〉

**14.2.3 希釈した液の投与速度は、以下の臨床試験における最大投与速度を超えないようにし、急速投与は行わないこと。

非典型性溶血性尿毒症候群患者におけるラブリズマブの血清中トラフ濃度 ($\mu\text{g/mL}$)

		5kg以上	10kg以上	20kg以上	30kg以上	40kg以上	60kg以上
		10kg未満	20kg未満	30kg未満	40kg未満	60kg未満	100kg未満
全集団	Day15	58 ^a , 432 (2例)	231 ^a ±87 (9例)	199±25 (4例)	142, 217 (2例)	-	435 (1例)
	Day183	193 ^a (1例)	701±244 (8例)	570±224 (4例)	511±100 (3例)	-	444 (1例)
	Day351	-	673±210 (9例)	573±297 (3例)	303, 623 (2例)	637 (1例)	639 (1例)
日本人	Day15	432 (1例)	-	-	-	-	-
	Day183	-	1,000 (1例)	-	-	-	-
	Day351	-	1,000 (1例)	-	-	-	-

平均値±標準偏差 (例数)

a) 初回投与量は300mg

(全身型重症筋無力症)

** 16.1.5 国際共同第Ⅲ相試験 (ALXN1210-MG-306) (全身型重症筋無力症患者)

18歳以上の補体阻害剤未治療の日本人及び外国人全身型重症筋無力症患者86例 (日本人6例を含む) に、本剤を1回2,400~3,000mgを開始用量とし、初回投与2週間後から1回3,000~3,600mgを8週間隔で点滴静注したときのラブリズマブの血清中トラフ濃度は下表のとおりであった⁹⁾。

全身型重症筋無力症患者におけるラブリズマブの血清中トラフ濃度 ($\mu\text{g/mL}$)

		40kg以上	60kg以上	100kg以上
		60kg未満	100kg未満	
全集団	Day15	556±116 (7例)	439±118 (46例)	358±68 (32例)
	Day183	887±83 (4例)	636±157 (39例)	471±109 (27例)
日本人	Day15	492, 520 (2例)	467±159 (4例)	-
	Day183	817, 833 (2例)	736±86 (3例)	-

平均値±標準偏差 (例数)

16.5 排泄

ラブリズマブはヒト化IgGモノクローナル抗体であることから、内因性の免疫グロブリンの消失経路と同じと推察される。

16.8 その他

18歳以上のラブリズマブ (遺伝子組換え) 10mg/mL製剤を投与している日本人発作性夜間ヘモグロビン尿症患者8例において、ラブリズマブ100mg/mL製剤に切替えたとき、切替え前後のラブリズマブの血清中トラフ濃度は下表のとおり同程度であった。

ラブリズマブの血清中トラフ濃度 ($\mu\text{g/mL}$)

	10mg/mL製剤投与時	100mg/mL製剤投与時
日本人	502.9±184.2 (8例)	498.0±214.3 (8例)

平均値±標準偏差 (例数)

製剤の切替えによる薬物動態の差異はみられなかった。切替え前後のLDH値の平均値の推移は安定していた。安全性への新たな懸念も認められなかった¹⁰⁾。

外国人発作性夜間ヘモグロビン尿症患者25例における10mg/mL製剤から100mg/mL製剤への切替えにおいても、切替え前後で薬物動態及びLDH値の平均値の推移に差異は見られず、安全性への新たな懸念も認められなかった¹¹⁾。

17. 臨床成績

17.1 有効性及び安全性に関する試験

(発作性夜間ヘモグロビン尿症)

17.1.1 国際共同第Ⅲ相試験 (ALXN1210-PNH-301) (補体阻害剤未治療の発作性夜間ヘモグロビン尿症患者)

18歳以上の補体阻害剤未治療の発作性夜間ヘモグロビン尿症患者 (総症例246例、日本人33例を含む) を対象とした多施設共同無作為化非盲検実薬対照並行群間比較試験が実施された。

なお、治験薬投与開始前3年以内又は原則投与開始2週間前までに髄膜炎菌ワクチン接種を必須とした。[5.1 参照]

本剤の用法・用量は、1回2,400~3,000mgを開始用量とし、初回投与2週間後から1回3,000~3,600mgを8週間隔で点滴静注することとされた。

1回あたりの本剤の投与量

体重	初回投与量	2回目以降の投与量
40kg以上60kg未満	2,400mg	3,000mg
60kg以上100kg未満	2,700mg	3,300mg
100kg以上	3,000mg	3,600mg

主要評価項目である「Day183までの濃厚赤血球 (pRBC) 輸血回避を達成した被験者の割合」及び「Day29からDay183までの乳酸脱水素酵素 (LDH) が基準値上限の1倍以下 (LDH正常化)」は、下表のとおりであり、いずれも本剤群のエクリズマブ群に対する非劣性が検証された⁵⁾。

主要評価項目の結果 (FAS)

	本剤群 (125例、うち 日本人18例)	エクリズマブ群 (121例、うち 日本人15例)
pRBC輸血回避		
Day183までのpRBC輸血回避を達成した被験者の割合 [95%信頼区間]	73.6% [65.87, 81.33] (92例)	66.1% [57.68, 74.55] (80例)
群間差 (本剤群-エクリズマブ群) ^{a)} [95%信頼区間]	6.8% [-4.66, 18.14]	
LDH正常化		
Day183までのLDH正常化 ^{b)} [95%信頼区間]	53.6% [45.9, 61.2]	49.4% [41.7, 57.0]
オッズ比 ^{c)} [95%信頼区間]	1.187 [0.796, 1.769]	

a) ランダム化時の層 (輸血歴 (治験薬投与開始前1年間のpRBC輸血ユニット数が0、1~14、15以上)、スクリーニング時のLDH値 (基準値上限の1.5倍以上3倍未満、3倍以上)) による6つの層内におけるグループ間差について調整したMantel-Haenszel法、非劣性限界値: -20%

*: pRBC輸血ユニットは、日本のpRBC1単位の量は海外で使用されているpRBC1単位の約半分であることから、日本人被験者のpRBC1単位は0.5単位に換算

b) Day29からDay183までの期間を通じ調整したLDHの正常化率投与群、輸血歴、ベースラインのLDH値を説明変数とした一般化推定方程式 (個体内の変動に対する相関行列には、対称的な一次自己回帰行列を仮定した)、非劣性限界値: 0.39

c) エクリズマブ群に対する本剤群のオッズ比投与群、輸血歴、ベースラインのLDH値を説明変数とした一般化推定方程式 (個体内の変動に対する相関行列には、対称的な一次自己回帰行列を仮定した)

52週データカットオフ日までの副作用は、本剤継続例44.0% (125例中55例) に認められた。主な副作用は頭痛で、本剤継続例20.0% (125例中25例) に認められた。

17.1.2 国際共同第Ⅲ相試験 (ALXN1210-PNH-302) (エクリズマブ (遺伝子組換え) 投与により血管内溶血が抑制されている発作性夜間ヘモグロビン尿症患者)

18歳以上のエクリズマブ (遺伝子組換え) 投与により血管内溶血が抑制されている発作性夜間ヘモグロビン尿症患者195例 (日本人12例を含む) を対象とした多施設共同無作為化非盲検実薬対照並行群間比較試験が実施された。なお、治験薬投与開始前3年以内又は原則投与開始2週間前までに髄膜炎菌ワクチン接種を必須とした。[5.1 参照]

本剤の用法・用量は、エクリズマブ (遺伝子組換え) の最終投与2週後に本剤の投与を開始することとし、1回2,400~3,000mgを開始用量とし、初回投与2週間後から1回3,000~3,600mgを8週間隔で点滴静注することとされた。

1回あたりの本剤の投与量

体重	初回投与量	2回目以降の投与量
40kg以上60kg未満	2,400mg	3,000mg
60kg以上100kg未満	2,700mg	3,300mg
100kg以上	3,000mg	3,600mg

量の本剤を体重に基づいて盲検下で点滴静注することとした。非盲検延長期には、投与26週時に、本剤群には900mgの本剤を、プラセボ群には体重に基づく初回投与量の本剤をいずれも盲検下で投与し、28週以降は、全ての患者に8週間隔で体重に基づく維持投与量の本剤を非盲検下で投与した。

体重に基づく投与レジメンを以下に示す。

体重	初回投与量	維持投与量
40kg以上60kg未満	2,400mg	3,000mg
60kg以上100kg未満	2,700mg	3,300mg
100kg以上	3,000mg	3,600mg

175例（日本人13例を含む）中、26週の評価を完了した患者は160例（過去2年間に免疫グロブリン大量静注療法又は血液浄化療法を施行した患者83例 [52%]、未施行の患者77例 [48%]、日本人10例では施行した患者4例 [40%]、未施行の患者6例 [60%]）であった。主要評価項目であるベースラインに対する投与26週後のMG-ADL総スコアの変化量は下表のとおりであり、プラセボ群と本剤群との間に統計学的に有意な差が認められた。

主要評価項目の結果（FAS）

		プラセボ群 (89例)	本剤群 (86例)	群間差	p値 ^{a)}
MG-ADL 総スコア 変化量	評価患者数	82	78	-	-
	最小二乗平均値 ^{b)} (標準誤差)	-1.4 (0.37)	-3.1 (0.38)	-1.6 (0.49)	0.0009
	95%信頼区間	-2.1, -0.7	-3.8, -2.3	-2.6, -0.7	

a) 制限付き最尤法に基づく反復測定混合効果モデル

なお、事後解析の結果、過去2年間に免疫グロブリン大量静注療法又は血液浄化療法を施行した患者での投与26週後のMG-ADL総スコアの変化量（平均値±標準偏差）は、プラセボ群（45例）で-1.4±3.16、本剤群（38例）で-3.1±3.11であり、上の表に示した全体集団の結果と同様であった。また、非盲検延長期のMG-ADL総スコアの変化量は下表のとおりであった。

非盲検延長期の結果（非盲検延長集団）

	プラセボ-本剤群 ^{a)}			本剤-本剤群		
	評価 例数	MG-ADL 総スコア	変化量	評価 例数	MG-ADL 総スコア	変化量
本試験の ベースライン	83	8.9±2.17	/	78	9.2±2.64	/
28週	80	5.4±3.44	-3.4±2.72	75	5.6±4.03	-3.7±3.21
36週	82	4.8±3.50	-4.0±2.96	77	5.3±3.99	-3.9±3.43
44週	79	4.4±3.27	-4.3±2.81	75	5.3±3.93	-4.0±3.14
52週	76	4.7±3.64	-4.0±3.04	72	5.4±4.13	-3.9±3.17
60週	58	5.1±4.36	-3.7±3.88	55	4.7±3.86	-4.5±2.80

平均値±標準偏差

非盲検延長期に移行した患者の52週の評価終了後にデータカットオフを実施した。60週のデータは、データカットオフ時点で60週の評価を終了している患者のデータである。

a) プラセボ-本剤群には26週から本剤を投与した。

ランダム化比較期での副作用発現頻度は、本剤群で33.7%（86例中29例）であった。主な副作用は悪心、頭痛が各7.0%（86例中6例）、下痢が4.7%（86例中4例）に認められた。

60週データカットオフ日までの副作用発現頻度は、34.3%（169例中58例）であった。主な副作用は頭痛が8.9%（169例中15例）、悪心が6.5%（169例中11例）、下痢が4.1%（169例中7例）に認められた⁹⁾。

**17.3 その他

17.3.1 本剤に対する抗体産生

発作性夜間ヘモグロビン尿症患者を対象とした国際共同第Ⅲ相試験において、本剤を投与された患者のうち（総症例436例、日本人44例を含む）、52週データカットオフ日までのいずれかの時点で、本剤投与下で抗体産生が認められた患者の割合は0.2%（1例/436例中、日本人は0例）であった。52週データカットオフ日までのいずれかの時点で、非典型溶血性尿

毒症候群患者を対象とした臨床試験において、1.1%（1例/89例、日本人は0例）に本剤投与下で抗体産生が認められた。全身型重症筋無力症患者を対象とした臨床試験において、60週データカットオフ日までのいずれかの時点で、本剤投与下で抗体産生が認められた患者はいなかった。[15.1 参照]

18. 薬効薬理

**18.1 作用機序

本剤は、補体タンパクC5に特異的に結合し、C5のC5a及びC5bへの開裂を阻害することで、終末補体複合体（C5b-9）の生成を抑制する¹²⁾。その結果、本剤は発作性夜間ヘモグロビン尿症患者及び非典型溶血性尿毒症候群患者における終末補体介在性血管内溶血を抑制する。また、全身型重症筋無力症患者において終末補体介在性の神経筋伝達障害を抑制する。

18.2 溶血抑制作用

*in vitro*において、本剤は抗ニワトリ赤血球抗体で感作させたニワトリ赤血球のヒト血清による溶血を抑制した¹³⁾。

19. 有効成分に関する理化学的知見

一般的名称：ラブリズマブ（遺伝子組換え）

Ravulizumab (Genetical Recombination) (JAN)

分子式：H鎖 C₂₂₀₅H₃₃₇₉N₅₇₉O₆₈₁S₁₈

L鎖 C₁₀₁₆H₁₅₈₃N₂₇₁O₃₃₄S₆

本質：ラブリズマブは、遺伝子組換えヒト化モノクローナル抗体であり、マウス抗ヒト補体C5抗体の相補性決定部、ヒトフレームワーク部、及びヒトIgG由来定常部からなる。L鎖の定常部はκ鎖に由来する。また、H鎖定常部のCH1部、ヒンジ部及びCH2部の一部はIgG2（γ2鎖）からなり、CH2部の残り及びCH3部はIgG4（γ4鎖）からなる。H鎖のMet429及びAsn435はそれぞれLeu及びSerに置換されている。ラブリズマブは、チャイニーズハムスター卵巣細胞により産生される。ラブリズマブは、448個のアミノ酸残基からなるH鎖2本及び214個のアミノ酸残基からなるL鎖2本で構成される糖タンパク質（分子量：約148,000）である。

20. 取扱い上の注意

外箱開封後は遮光して保存すること。

21. 承認条件

21.1 医薬品リスク管理計画を策定の上、適切に実施すること。

（発作性夜間ヘモグロビン尿症）

21.2 国内での治験症例が極めて限られていることから、製造販売後、一定数の症例に係るデータが集積されるまでの間は、全症例を対象に使用成績調査を実施することにより、本剤使用患者の背景情報を把握するとともに、本剤の安全性及び有効性に関するデータを早期に収集し、本剤の適正使用に必要な措置を講じること。

21.3 本剤の投与が、発作性夜間ヘモグロビン尿症の診断、治療に精通し、本剤のリスク等についても十分に管理できる医師・医療機関のもとで、髄膜炎菌感染症の診断、治療に精通した医師との連携を取った上でのみ行われるよう、製造販売にあたって必要な措置を講じること。

（非典型溶血性尿毒症候群）

21.4 国内での治験症例が極めて限られていることから、製造販売後、一定数の症例に係るデータが集積されるまでの間は、全症例を対象に使用成績調査を実施することにより、本剤使用患者の背景情報を把握するとともに、本剤の安全性及び有効性に関するデータを早期に収集し、本剤の適正使用に必要な措置を講じること。